

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 28 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究

研究期間：2021～2023

課題番号：21K12867

研究課題名(和文)パリ音楽院ピアノ科試験曲目データベース補完とオープンアクセス化(1842-89)

研究課題名(英文)Supplementation and Open Access of the Paris Conservatory Piano Examination Repertoire Database (1842-89)

研究代表者

上田 泰(上田泰史)(Ueda, Yasushi)

京都大学・人間・環境学研究所・准教授

研究者番号：90783077

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文):本研究は、パリ国立音楽・朗唱院のピアノ科の副次的なクラス(予科及び鍵盤楽器学習クラス)の定期試験で演奏された曲目をデータベース化し、公開するものです。期間は、ピアノ科定期試験関連資料資料に記録が現れ始める1842年から1889年までを対象としています。この調査で、演奏曲目不明の生徒を含め、のべ5608名の生徒名が入力されました。そのうち、作曲家名が判明した曲目は2752件、演奏曲目のジャンル(「その他」も含む)が同定できたのは2639件です。データは、ピティナ音楽研究所のウェブサイト上で公開しました。

研究成果の学術的意義や社会的意義

19世紀のピアノ教育においてどのような作品が重視されていたのか、それらがどのように変遷したのかを知ることとは、現代のピアノ演奏のレパートリーを歴史的観点から客観的に見つめ直す機会を与えてくれます。私たちが自明のものとして受容しているレパートリーは、単に作品の自律的な価値の帰結なのでしょうか、それとも教育制度、美学、コンクール等の社会的慣習の帰結なのでしょうか。近代的なピアノ教育の先駆的教育機関であるパリ音楽院で、標準的(古典的)なレパートリーを確立・継承・拡散する体制がどのように形成されてきたのか。本研究の意義は、その一側面を演奏曲目という観点から解明するための情報整理を行った点にあります。

研究成果の概要(英文): This study involves creating a database of the pieces performed during the semestrial exams in the secondary piano classes ("preparatory classes" and "keyboard study" classes) at the Conservatoire de musique de Paris and making it publicly available. The period covered is from 1842, when records of the pieces performed during the piano department's semestrial exams first began to be recorded, to 1889. In this investigation, a total of 5,608 student names were entered, including those whose performance pieces were unknown. Of these, 2,752 pieces have been identified by composer, and 2,639 pieces have been classified by genre (including "others"). The data has been made available on the PTNA Research Institute of Music's website: <https://enc-paris-conservatory-exam.piano.or.jp/en>.

研究分野：音楽学

キーワード：パリ国立音楽院 ピアノ教育 レパートリー 定期試験 データベース

## 様式 C-19、F-19-1、Z-19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は、筆者が東京藝術大学博士課程在籍中から取り組んできたパリ国立音楽院ピアノ科定期試験曲目データベースを補完するものである。19世紀の音楽機関における演奏曲目情報の研究は、ピアノ音楽における「古典」概念の形成プロセスを検証するうえで重要な意味を有する。18世紀初頭にフィレンツェで発明されたピアノは、フランス革命後、急速にチェンバロに取って代わり市民の間に普及した。1830年代にはヨーロッパ大陸でロマン主義と産業革命の恩恵を受けて新たなピアノ作品が次々に書かれ、新たなレパートリーを形成した。パリ国立音楽・朗唱院(1795年創立、以下パリ音楽院と記す)も、その黎明期からピアノ教育に力を入れ、教則本を編纂・改訂してきた。市民教育における「新楽器」であるピアノは、20世紀前半に至るまで、レパートリーを更新しながら構築していった。このレパートリー構築過程を明らかにするために、これまで、下記のプロジェクトを通して、定期試験演奏曲目が史料上に現れる1842年から1956年までの定期試験演奏曲目の一覧を作成し、データベースを公開してきた。本研究は、【表1】の3に当たる最終段階に位置している。

【表1】

研究の枠組み	入力範囲		
	専科( / 上級クラス)	予科( / 第1課程)	鍵盤楽器学習
1. 博士論文(東京藝術大学)	1842~1889	—	—
2. 科研費: 若手研究(B) 17K13347	1900 ~ 1954*	1900~1954*	—
3. 科研費: 若手研究 21K12867	—	1842~1889*	1842~1878*



\*は公開済(2024年5月時点、ピティナ音楽研究所内ウェブサイト <https://enc-paris-conservatory-exam.piano.or.jp/>)

【表1】の「予科」は、「専科」に登録する前に受ける準備クラスで、1850年度に廃止された。その後、1935年度より第1課程が上級クラスの下位に設けられた。「鍵盤楽器学習クラス」は1878年度から再び「予科」となった。本研究は、1~2の研究を背景として、これまでデータ化されていなかった1842年~1889年に至るピアノ科定期試験演奏曲目のうち、予科と鍵盤楽器学習クラスのレパートリーに関連する情報を整備するものである。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、1842年から1889年までを対象期間とし、パリ音楽院ピアノ科の専科(または上級クラス)・予科・鍵盤楽器学習科の定期試験で演奏された曲目およびそれに関連する情報をデータベースに入力し、オンラインで公開することである。

### 3. 研究の方法

データベース作成のために、フランス国立文書館(ピエールフィット分館)所蔵の史料系列AJ37に含まれる次の3種類の史料群を参照した。A群: 担当教授が学期末に作成する生徒の進捗状況報告書、B群: 試験運営を担当した教育委員会の議事録および、C群: 試験官が各生徒に関する所見を記したメモ台帳。A群はフランス国立文書館によりオンラインで公開されているが、B群・C群は同機関に赴いて史料を撮影した。ピアノ科の定期試験は夏期と冬期に行われていたため、年度につき2回分の試験情報を入力した。入力に際しては、データ数が膨大な数に上るため、研究協力者の助力を得た。これら3種類の史料を参照することにより、曲目情報を相互補完的に抽出することができる。なお、生徒名の綴りについては、クラス名簿(AJ/37/153~AJ/37/161)に準拠した。

演奏曲目関連情報を整理するために、次の項目を設けた。試験実施年度、実施日、クラス担当教官、クラス種別、生徒名、演奏曲(作曲家、曲名、作品番号または作品目録番号)、調、楽章、ジャンル、史料情報。これらの項目をエクセルファイルに入力し、その後、ピティナ音楽研究所の協力の下、【図1】のように表示されるよう、オンライン・データベース・フォーマットを整備した。

- 年度：1879-1880 実施日：1880年 1月 27日  
 担当教官：Decombes (Émile Decombe) クラス：Préparatoire  
 生徒名：Satie  
 演奏曲：Hiller / 1er Concerto Op.5 目録番号：- 調：f 楽章：- ジャンル：Concerto

史料

教授報告：1er Concerto ... F. Hiller [AJ/37/287]  
 議事録：1e Concerto [AJ/37/206-2]  
 試験官：Ernest Altés メモ：- [AJ/37/230/1]  
 試験官：Sauzay メモ：- [AJ/37/233/1]  
 試験官：Duvernoy メモ：Hiller Concerto en fa mineur [AJ/37/238/1]  
 試験官：Herz メモ：- [AJ/37/238/3]

## 4 . 研究成果

### 4 - 1 . 史料の状況

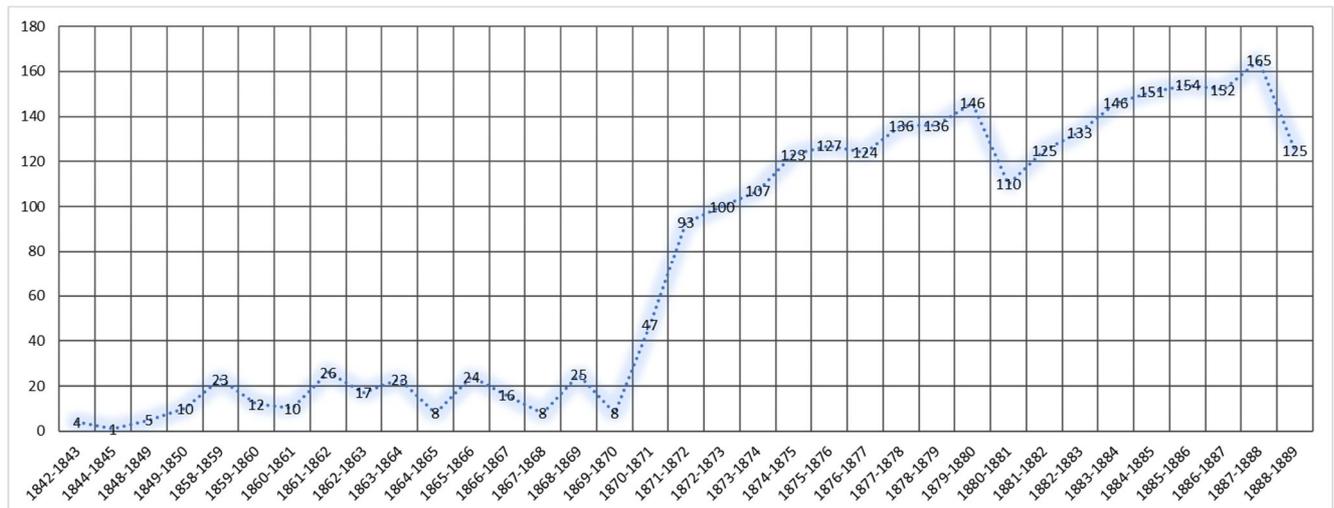
演奏曲目情報のうち、少なくとも作曲家名が見出された史料は次の通りである。

- A 群：AJ/37/262;AJ/37/264;AJ/37/266;AJ/37/267;AJ/37/268;AJ/37/269;AJ/37/270;AJ/37/275;AJ/37/276;  
 AJ/37/277 ; AJ/37/278 ; AJ/37/279 ; AJ/37/280 ; AJ/37/281 ; AJ/37/282 ; AJ/37/283 ;  
 AJ/37/284 ; AJ/37/285 ; AJ/37/286 ; AJ/37/287 ; AJ/37/288 ; AJ/37/289 ; AJ/37/290 ; AJ/37/291
- B 群：請求記号：AJ37 195-1; AJ37 206-1,2,3; AJ 37 207-1, AJ 37 304
- C 群：AJ/37/209 ~ 212;AJ/37/224/2,3;AJ/37/224/3;AJ/37/225/2;AJ/37/230/3;AJ/37/220/3;AJ/37/223/3;  
 AJ/37/223/4;AJ/37/224/4;AJ/37/227/1;AJ/37/227/2;AJ/37/230/1;AJ/37/232/1;AJ/37/233/1;AJ/37/233/2;  
 AJ/37/239/2 ; AJ/37/235/1 ; AJ/37/238/1 ; AJ/37/238/3

### 4 - 2 . 入力データの状況

一連の入力作業の結果、演奏曲目不明の生徒を含め、のべ 5608 名の生徒名が入力された。そのうち、作曲家名が判明した曲目は 2752 件、演奏曲目のジャンル(「その他」も含む)が同定できたのは 2639 件である。演奏曲目が記録される頻度は年代によって異なり、予科・鍵盤楽器学習クラスについては【グラフ 1】からは、1870-1871 年度から記録が慣習化されたことがわかる。

【グラフ 1】作曲家名判明件数(年度別) 縦軸単位：件



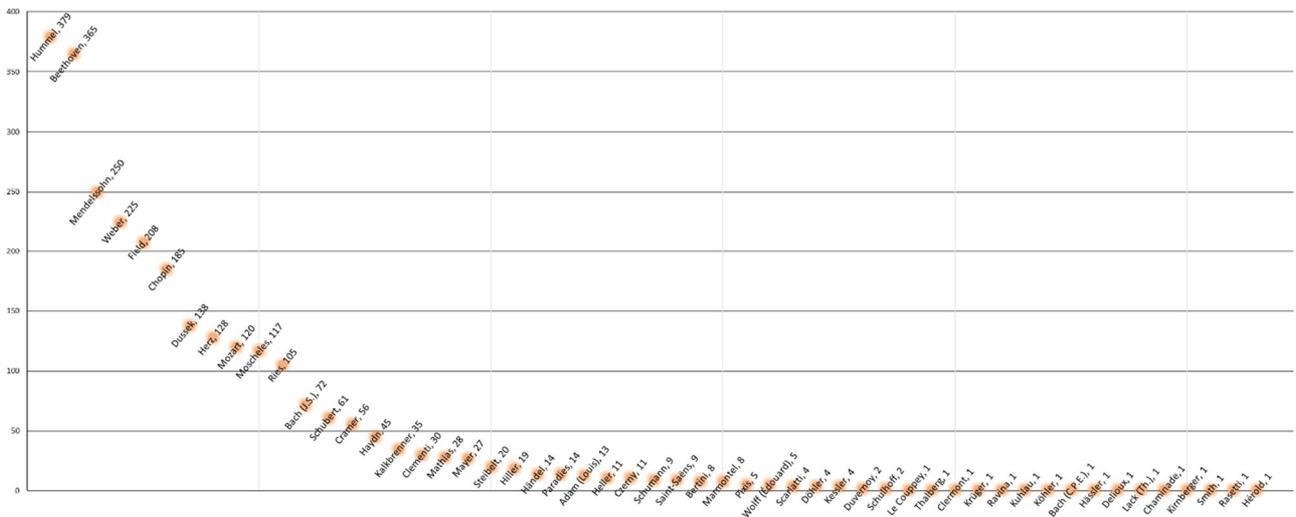
それゆえ、以下に提示する作曲家・ジャンルの傾向は、概ね 1870 年以降の傾向と見るべきである。

### 4 - 3 . ジャンルと作曲家の傾向

本報告書では、すべての作曲家・ジャンルの傾向について分析することはできないので、グラフ上、とくに重要なジャンル・作曲家に限って扱うこととする。

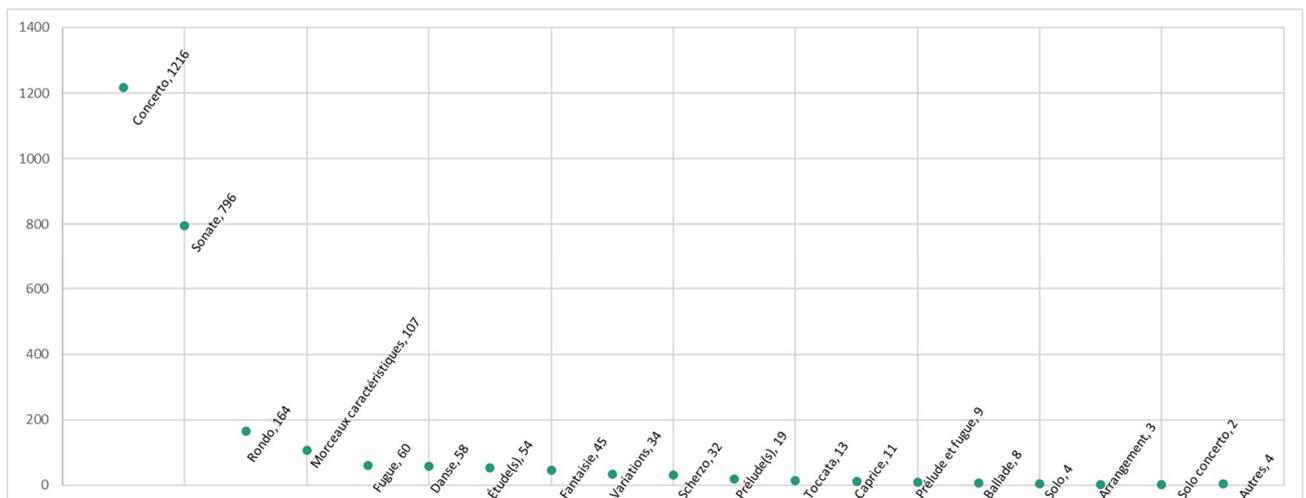
【グラフ 2】は、作曲家の出現頻度を多い順に表示しており、【グラフ 3】はジャンルの出現頻度を多い順に表示している。

【グラフ2】作曲家別出現頻度 単位：件



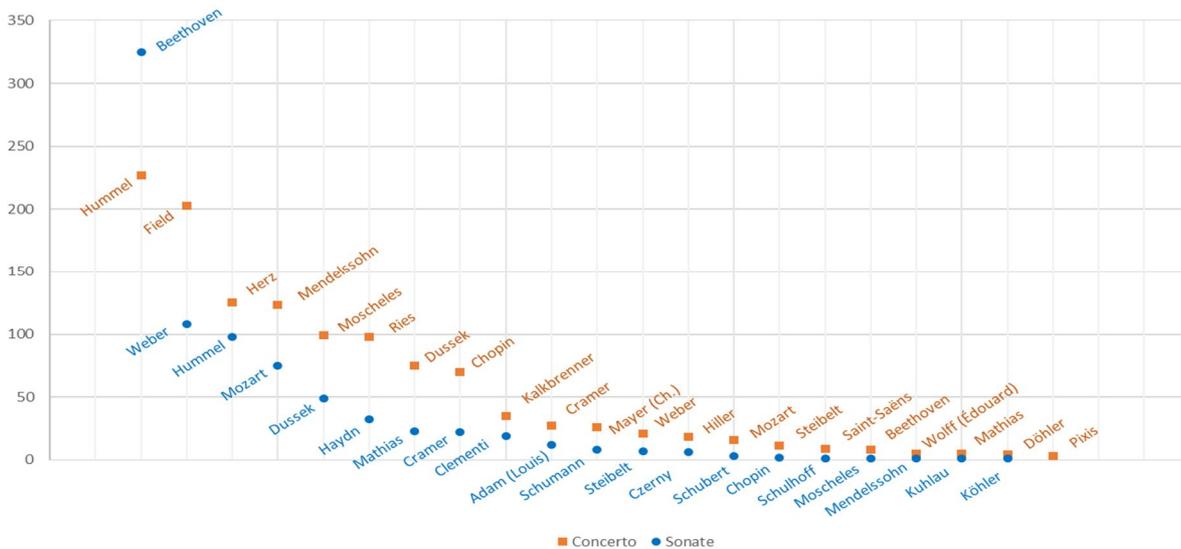
【グラフ3】ジャンル別出現頻度 単位：件

註：「Solo」は、協奏曲で用いられる技巧を学習するための中規模作品で、教育的なジャンルを成していた。「Solo concerto」は、オーケストラ伴奏なしの独奏協奏曲を指す。前奏曲とフーガが対で演奏された場合は、「Prélude et fugue」に分類している。



これらのグラフを比較すると、作曲家において群を抜いて多いのは、フンメル Johann Nepomuk Hummel (1778 ~ 1837) とベートーヴェン Ludwig van Beethoven (1770 ~ 1827) であり、ジャンルにおいては協奏曲 (Concerto) とソナタ (Sonate) が群を抜いていることが分かる。2人の作曲家とジャンルの関係に着目すると、【グラフ4】が示すように、ベートーヴェンはソナタを代表し、フンメルが協奏曲を代表していたことがわかる。1870年代以降、専科の定期試験においてもソナタの協奏曲に対する優位は確認されており (上田 2016, 426)、1870年代以降の予科でも同じ傾向が生じていることがわかる。

【グラフ4】ソナタと協奏曲別出現頻度 単位：件



専科において、ソナタ・ジャンルにおいて上位を占めるのはベートーヴェンとウェーバーであったが（上田 2016, 428）予科・鍵盤楽器学習クラスでも同様であったことがわかる。予科・鍵盤楽器学習クラスで採り上げられたベートーヴェンのソナタは初期～中期の作品（《ピアノ・ソナタ第 26 番》作品 81 まで）であるが、1875 年から 1882 年にかけて後期ソナタも 5 回（作品 106 が 1 回、作品 110 が 4 回）記録されている。このことは、予科にかなり学習の進んだ生徒が在籍していたことを示している（専科への進学を待機していた学生の可能性が考えられる）。

一方、協奏曲ジャンルにおけるフンメルに演奏頻度は、ショパンに重点を置いていた専科（上田 2016, 431）に比べると、かなり高いといえる。フンメルの協奏曲は第 5 番、第 3 番、第 2 番の順に多く演奏されている。パリ音楽院の修了試験においてフンメルの協奏曲が 1870 年以降、女子クラスで 1 回しか課題曲に指定されていないことに鑑みると、フンメルはすでに協奏曲というジャンルの代表者ではなくなっていた。しかし、そのことは生徒たちがフンメルの協奏曲を弾かなくなったことを意味するのではなく、基礎的なレパートリーとして教育的古典としての地位を与えられたことを意味する。協奏曲ジャンルにおけるベートーヴェン作品の演奏頻度は、ソナタに比べれば極めて低い。これは、フランスにおいて、ベートーヴェンの協奏曲が「交響的協奏曲」と見なされ、ピアノ演奏に関してはこれよりもフンメルやショパンのいわゆる「華麗な brilliant」様式の協奏曲が好まれたことと関係している（上田 2016, 503）（モーツァルト、シューマンも同様に交響的協奏曲の作曲家と見なされていた）。

#### 4-4. 同時代の作曲家

専科では 1870 年以降、リスト Franz Liszt（1811～1886）、アルカン Charles-Valentin Alkan（1813～1888）、シュルホフ Julius Schulhoff（1825～1898）、マチアス Georges Mathias（1826～1910）、ルービンシテイン Anton Rubinstein（1829～1894）、サン＝サーンス Camille Saint-Saëns（1835～1921）といった存命中のピアノ音楽作曲家の作品も演奏されていた。一方、予科・鍵盤楽器学習クラスでは、存命作曲家の割合はそれほど大きくはない。専科の傾向を反映して、シュルホフや音楽院ピアノ教授であったマチアスの作品や、フランスを代表する作曲家となっていたサン＝サーンスの協奏曲（第 2 番）などは演奏されているが、リスト、アルカン、ルービンシテインの作品は、予科・鍵盤楽器学習クラスでは全く採り上げられなかった。これは、彼らの高度作品の難易度と先鋭的なロマン主義に与する彼らの美学、つまり古典的均整を重んじるパリ音楽院の態度と容易には相いれず、教育的基礎を形成するレパートリーにはなり得なかったためであろう。

#### 5. まとめに代えて

本研究はデータベース構築を目的としており、これまで入力してきたデータの分析は、今後の課題である。当面は、まだ公開データに追加していない 1842 年から 1889 年までの専科のデータを公開するために、公開用フォーマットに即したデータ・セットの作成を継続し、既存のデータベースに統合する。このデータベースは、作曲家・ジャンルの変遷のみならず、教員による選曲の傾向、各生徒の演奏曲目の変遷パターン、男子クラス・女子クラスの傾向の相違など、様々な観点からの分析が可能であり、筆者のみならず、他の研究者によっても有効活用されることを期待したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 上田泰史
2. 発表標題 The Formation of the French “Modern” and the German “Classical” Repertories during the Class Examinations of Piano at the Conservatoire de musique de Paris (1841-1914)
3. 学会等名 21st Quinquennial IMS Congress (IMS2022) (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

パリ国立音楽院ピアノ科定期試験曲データベース（制作協力：ピティナ音楽研究所） <a href="https://enc-paris-conservatory-exam.piano.or.jp/">https://enc-paris-conservatory-exam.piano.or.jp/</a>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	木内 涼  (Kiuchi Ryo)		
研究協力者	高 菜々  (Taka Nana)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	平野 貴俊  (Takatoshi Hirano)		
研究協力者	川上 啓太郎  (Kawakami Keitaro)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関